

木 2  
1329  
3



門未加公倍  
1329  
3

假字本末下卷

片假字

伴信友稿

假字反切義解序小。此書の尾に仲春日花山耕雲散人  
 搜求舊庫反故中而手録以歸庵倩見開秘密之與藏示  
 推實之正軌然音義輕重濁猶未盡曉而有益于後學  
 功不矣。申歲夷則下弦阿闍梨之正一本件紙文のつ  
 已元和一庚申歲夷則下弦阿闍梨之正一本件紙文のつ  
 散人明魏字耕雲自作和歌傳則應命筆染紙花山  
 州花頂山馬績作者部類下賢曰卿子名長親詠朝院流尹  
 大納言新賢古孫集亦新葉集載右大將長親詠朝院流尹  
 首蓋長親慕君至孝亦歌音載我朝長親居  
 憂者唯速世貞觀年直也。人者也。于時正德三年癸巳歲孟  
 耳長親入道明魏匪直也。人者也。于時正德三年癸巳歲孟

假字本末下卷



春八日以寧局今出河如雞口傳記せり。さき長親卿著  
右此一卷者南禪寺和歌。院耕雲南朝推大上人。所而和歌  
之。道深切著明也。云禪。耕雲。南朝。推大。納言。右藤  
原。長親。卿。法名。鑑明。魏。又。耕雲。南朝。推大。納言。右藤  
の。注。源氏。小鑑。明。魏。又。耕雲。南朝。推大。納言。右藤  
り。又。同。物。語。氏。小鑑。明。魏。又。耕雲。南朝。推大。納言。右藤  
と。以。ふ。物。語。氏。小鑑。明。魏。又。耕雲。南朝。推大。納言。右藤  
家。卿。の。定。免。多。り。跋。弘。和。元。年。持。公。へ。進。也。源。氏。物。語  
の。四。聲。の。定。免。多。り。跋。弘。和。元。年。持。公。へ。進。也。源。氏。物。語  
の。三。聲。の。定。免。多。り。跋。弘。和。元。年。持。公。へ。進。也。源。氏。物。語  
の。隨。ひ。て。漢。字。本。語。音。の。三。泥。を。撰。て。假。字。用。ふ。聲  
と。り。あ。ま。り。漢。字。本。語。音。の。三。泥。を。撰。て。假。字。用。ふ。聲  
か。ら。歌。集。の。り。き。る。説。と。論。の。三。泥。を。撰。て。假。字。用。ふ。聲  
千。首。愚。僧。四。十。年。前。詠。也。云。々。と。稱。ふ。應。永。十。年。の。跋。又。一  
書。と。も。よ。き。あ。え。多。り。見。て。其。人。故。ら。き。ら。ね。も。ひ。く。や。り。す。ら。件  
吟。書。と。も。よ。き。あ。え。多。り。見。て。其。人。故。ら。き。ら。ね。も。ひ。く。や。り。す。ら。件  
牙。く。此。義。解。の。文。弊。く。學。を。得。ら。き。ら。ね。も。ひ。く。や。り。す。ら。件  
牙。く。此。義。解。の。文。弊。く。學。を。得。ら。き。ら。ね。も。ひ。く。や。り。す。ら。件

太古之代未有漢字。君臣百姓老少口々相傳及乎應神  
天皇御世始渡儒經學書契而凡國家用文字有真字有  
假字。真字對假字正也。假字對真字權也。字名義即物名  
也。云々。都。不。過。於。以。義。為。真。字。音。為。假。字。而。已。云。名。義。云。此  
ま。ど。の。文。意。ハ。因。此。舊。事。本。紀。日。本。書。紀。所。用。男。假。字。數  
に。上。卷。の。文。意。ハ。因。此。舊。事。本。紀。日。本。書。紀。所。用。男。假。字。數  
多。是。也。男。假。字。と。上。文。又。音。為。假。字。と。云。る。に。當。り  
此。さ。し。次。の。文。ハ。伊。呂。波。假。字。と。云。る。亦。如。古  
り。さ。く。下。文。ハ。伊。呂。波。假。字。と。云。る。亦。如。古  
事。記。萬。葉。集。無。用。真。字。假。字。以。義。與。音。相。雜。筆。之。漢。字。亦  
字。音。假。字。を。も。相。雜。へ。と。書。る。由。り。但。し。萬。葉。集。の  
中。に。真。字。假。字。の。り。古。事。記。を。書。さ。べ。て。の。文。ハ。そ。を。あ。き  
大。槩。を。い。る。假。字。の。り。古。事。記。を。書。さ。べ。て。の。文。ハ。そ。を。あ。き  
歌。を。字。音。の。假。字。の。り。古。事。記。を。書。さ。べ。て。の。文。ハ。そ。を。あ。き

○假字本末下卷

るも疎 到於天平勝寶年中。右丞相吉備真備公取所通  
用于我邦假字四十五字。省偏旁點畫。作片假字。抑四十  
字。阿行を除音響。反阿伊字。江乎五字。下は豎列五字。と  
此乃天地自然之倭語焉。是故豎列五字。阿伊字。江乎。横  
列十字。豎の一字おと。横の二字。加入同音五字。合せると  
音を加入せり。五字を同為五十字。を重加して五十字  
形すと。以るあり。且又横十字。隨唇舌牙齒喉備宮商  
角徵羽變宮變徵七聲。奇哉。世俗傳稱之。云吉備大臣倭  
片假字反切。五十音。有其口決矣。然後弘仁天長年中。釋  
空海造四十七字。伊呂波。補圖於二字。以便于女童。其體

則草書。此伊勢物語。古今和歌集。所用女假字四十七字  
也。予學和歌。樂音律。其餘力觀吉備大臣倭片假字反切。  
則闕無音義。竊注己意。且又横十字。隨云々。備云々と云  
る趣の義の闕て注さざる。今已が意をもて。新  
字音義。方位。字を擧げ。その本文。亦考全書。以解片假字  
説を。あは。要あけ。論を。其亦考全書。以解片假字  
全書と。ハ。五十音圖。書き。ける。片假字の本字を云。する  
よ。其全き本字を考へ。る。片假字の作れる趣を解。る  
由り。其義解中。に。倭片名曰。倭片假字反切義解。聊  
假字畫解とある。あは。る。名曰。倭片假字反切義解。聊  
述由緒。冠假字。首云。爾と云。る。か。くて。以。を。ゆる。吉備  
大臣倭片假字反切口決を載て云  
上父字。行。豎。下母字。行。横。其隅生子字。

例 伊<sup>イ</sup>上父<sup>ウ</sup>和<sup>ワ</sup>下母<sup>モ</sup>反<sup>レ</sup>阿<sup>ア</sup>隅<sup>コ</sup>子<sup>シ</sup>  
亦<sup>ヤ</sup>也<sup>ウ</sup>上父<sup>ウ</sup>字<sup>モ</sup>下母<sup>モ</sup>反<sup>レ</sup>勇<sup>ユ</sup>歸<sup>レ</sup>子<sup>シ</sup>

横行歸<sup>レ</sup>父<sup>ニ</sup>字<sup>ニ</sup>。豎行歸<sup>レ</sup>母<sup>ニ</sup>字<sup>ニ</sup>。其歸<sup>レ</sup>生<sup>ス</sup>子<sup>コ</sup>字<sup>シ</sup>。

例 阿<sup>ア</sup>上父<sup>ウ</sup>和<sup>ワ</sup>下母<sup>モ</sup>反<sup>レ</sup>阿<sup>ア</sup>歸<sup>レ</sup>子<sup>シ</sup>  
亦<sup>ヤ</sup>也<sup>ウ</sup>上父<sup>ウ</sup>勇<sup>ユ</sup>下母<sup>モ</sup>反<sup>レ</sup>勇<sup>ユ</sup>歸<sup>レ</sup>子<sup>シ</sup>

まゝ五十音圖とく

□内五字序所謂同音五字是也。改<sup>テ</sup>乎<sup>ヲ</sup>伊<sup>イ</sup>作<sup>ル</sup>於<sup>レ</sup>困<sup>ニ</sup>者。

空海所為矣。

ア イ ウ エ ヲ  
ワ <sup>イ</sup> <sup>ウ</sup> <sup>エ</sup> <sup>ヲ</sup>

ヤ <sup>イ</sup> <sup>ユ</sup> <sup>エ</sup> <sup>ヨ</sup>  
ナ ニ ヌ 子 ノ  
タ チ ツ テ ト  
ラ リ ル レ ロ  
ハ ヒ フ ヘ ホ  
日 マ ミ ム メ モ  
カ キ ク ケ コ  
サ シ ス セ ソ

上件義解の倭片假字畫解のとあろに載せりかくは  
但義解の倭片假字の傍に其本字を書添り其  
ハ明魏の考の考の畫解のりその本字當りたり

假字本末下卷

も所るるうへまあまを要とあらぬを捨て寫さば  
さう上ふも云へるおとく此ほりふ假字反切音義假  
字音義方位ま追考伊呂波字畫解と記せるを明  
魏孺意をもて注せる説も甚く誤りまきむすべ  
とらび本書を  
見て知る書し

今按るふ吉備真備公をたあゆる多才の儒者みく續  
日本紀孺公の薨らまし所は靈龜三年三月十二日通本  
二年二月十二日本從使入唐留學受業研覽經史該涉衆  
とあるハ誤り  
藝我朝學生播名唐國者唯大臣及朝衡二人而已天平  
七通本年歸朝授正六位下拜大學助高野天皇師之  
受禮記及漢書恩寵甚渥賜姓吉備朝臣と見え本朝文  
粹に載せる三善清行朝臣孺異見封事十二條の中に

至于天平之代右大臣吉備朝臣恢弘道藝親自傳授即  
令學生四百人習五經三史明法算術音韻籀篆等六道  
と見えせられた音韻孺道ふも長きひきりし形りそ  
のかみ唐國は天竺より傳をまとりつる悉曇法を受  
習を來くそれ倣ひ皇國の正しき音聲を轉し音  
位を換へて新ふ五十音圖を作りさく其對譯を用ふ  
法は漢字音の區オナジにして一同からざるが故も更ふ當  
時皇國通用孺字音ヨミも訓をも假借りて姑く對譯の  
せれふ四十五字を定め其字孺偏旁點畫を省きあせ  
して簡約ある一體の字を製りたるが以てゆゑ片



其表晋卿が事を空海が性靈集為藤真川舉淨豐子  
遙慕聖風遠辞本族誦兩京之音韻改三吳之訛響口吐  
唐言發揮嬰學之耳目と云晉り音韻又精一か晋し人  
が故推案ふるお真備公の計らひを晋卿を帰化と  
らし免もたら學びおとたとして音圖をも作定免給  
するものなる法し義解の序ふ天平勝寶年中に作り  
ぬへりといふ海年頃もよく合ひきあゆるなり古  
き史書どもを按ふるお古ハ音韻の學とくをある事  
ぬく音博士とて字音を教る者を唐國人を任用ら  
つときおえたり此晋卿をもすぬち音博士と任さ

新くりけぬが此後唐國人を任さきたる事れをさ  
さたおえぬを真備公が片假字を製り反切の法を定  
ぬへるは始りて漸お漢籍讀むおとの容易くぬける  
が故ぬる法しかくて其音圖は據りて今皇國言の奇  
しく妙ある趣を解き明らかむるうへるとりてをか  
りて漢字よむ料も立おさうていみじ世れをり  
らとぬけるをあやしたまぐよひさをしく免ぐと免  
思ふゆよこそハ何り々也上に引けるおどく續紀は  
野天皇師之受禮記及漢書恩寵甚渥賜姓吉備朝臣と  
見えたるを按ふるおそのらぬ女帝にあちバ漢  
教授奉りぬへるを免びらしく便よくぬもほしきる



る。後世も草假字を女假字女手取ども稱ひて。もたらむ  
るもねもひ合せらる。然るもそれ真備公の五  
十音圖中。本音を四十五字取りたる。空海圍於此二  
音を増補し。本音四十七字と爲し。空海圍於此二  
まこと。に然る事なる。其を空海入唐して。始て真  
言秘密法を受。梵字學をも傳たり。と云へ。悉曇  
法を精しく明ら。免曉りて。舊圖を改訂して。於圍の二  
音をも増補せるもの。此空海の功も更ふ。と  
免でき。但し。衣惠の音の差別を素より音圖にあり。  
十五字増補圍於二字。と云ふ。るをそぐへり。音圖を正  
して後。伊呂波を作れりと云ふ。後き。おとわ。り。

但し件の音圖横行。ア。ワ。ヤ。ナ。タ。ラ。ハ。マ。カ。サ。と次第  
き。る。を。當時。を。精。し。から。ざ。り。り。又。空。海。の。改。補  
此。ワ。行。の。ヲ。を。オ。と。し。や。行。此。イ。を。井。と。せ。る。ハ。舊。より  
空海の然改るより。又空海此改補の説も。此。み。と。を  
て。明。魏。此。私。よ。の。せ。ら。れ。と。る。に。り。以。づ。此。も。取。か  
精。し。から。ば。其。の。由。ハ。下。さ。て。又。真。備。公。の。時。世。より。は  
やく古事記。日本紀等。以。圍。於。遠。此。言。れ。差。別。正。し。く  
字音をも正しく用ひ別せられ。る。事。著。明。く。少。も。混。り  
きを。件。の。公。此。音。圖。よ。そ。此。井。才。を。載。ら。此。ざ。る。を。以。り  
ぬ。る。事。より。と。考。ふ。る。公。の。世。より。以。前。の。む。り。ハ。

漢字をよむるを。一字おとふその音を正し明く免て。  
讀習ひ来れるものよして。悉曇法は據りてさざりる  
事の所らざりしから。何れ混迷も無りつるをかの  
悉曇法よよりて音圖を製するへあうひくしたる  
所をせてかへりて井オれ差別は惑し何りて。姑く闕  
きを免る所を法し。後の世と知りて。此道は習熟する  
上は意もて深く難む法きよ何らば。比等法きよを  
世は巴思ハガ。餓く梵文を採て蒙古の字母四。然るに  
十三を爲れるも。おのけうら似きる趣あり。空海井オ  
空海井オ。此二音を補ひきるよよりて。音を備りたる  
ど。猶横行の次第ハよくもどくのは。りつるを。又後

よ考正せる人々。能出来て。今の如くを定まりしる  
もの。能る法し。高野寺の僧。此著として。刊本よせる野  
の講坊。秘蔵す。大師真筆の片假字ハ。當山の  
能るよ。のり。其寫を得て。おきり。此の證よ。せま  
れど。いま。詳ならぬ。そ待遠なるや。さて音圖の阿  
行よ。於を属する。又豎行の音。此位置。又横行。此次第。能  
どの。中昔。能書よ。見えり。今と差するを。予が見。何り  
きるを。擧法し。阿行よ。於を属する。源順朝臣集  
よ。あ。い。う。え。を。一音づ。初と終の句。能上よ。おきり  
よ。免る歌五首。何り。ち。て。文丙午。寫本の和名抄よ。一  
本卷首云と。り。五十音を書入るるも。阿伊烏衣於。ま



今圖を加へて寫せり。此書今より百五十年ばより  
形は頗る撰著せる書なり。其の音圖をそれより  
以ての頃傳はりけるものも遠からず。彼國人は皇國  
の泰渡り始りたるものも遠からず。彼國人は皇國  
におもむく次第より。其の音圖をそれより。彼國人は皇國  
近きも。彼國人の聞悟。既に此の音圖の事を論ずるは  
らひき。彼國人の聞悟。既に此の音圖の事を論ずるは  
る。其の音圖をそれより。彼國人は皇國  
く。其の音圖をそれより。彼國人は皇國  
其の音圖をそれより。彼國人は皇國  
る。其の音圖をそれより。彼國人は皇國  
ら。其の音圖をそれより。彼國人は皇國  
り。其の音圖をそれより。彼國人は皇國  
て。其の音圖をそれより。彼國人は皇國

反同、同音、取、下、字、又、一、行、之、中、切、取、下、切、字、と、ありて、羅  
為、正、字、輕、重、清、濁、依、上、字、平、上、去、入、依、下、字、と、ありて、羅  
摩、阿、可、左、多、那、波、和、夜、の、次、第、を、記、せ、り。於、良、牟、駄、み、と、  
朝鮮の吏道を書くる音圖の横行は、お新らをおもへ  
異形なるハ、因よ上に注せるが、おとし、お新らをおもへ  
む、中、世、豎、五、音、の、位、置、横、十、行、の、次、第、に、も、亦、異、形、る、説  
新、出、来、き、る、事、も、あり、と、る、り、遂、は、今、新、お、と、く、正、し、く  
定、ま、り、と、る、もの、新、け、り、さ、と、真、備、公、の、片、假、字、製、ら  
新、と、る、を、唐、國、の、例、に、倣、ひ、ぬ、所、は、あ、ら、や、り、其、の、漢、籍  
字、林、廣、記、あ、ど、に、見、え、と、る、撫、琴、手、法、の、譜、の、字、の、畫、を  
省、き、て、作、る、種、々、の、中、に、泛、を、ノ、消、を、ム、綽、を、ト、急、を、ク、  
吟、を、テ、掃、を、ヨ、散、を、サ、按、を、ウ、新、と、作、り、か、く、る、書、さ、ぬ

かの國に古き例ある様し。片假字のいどよく似ざる  
 をおもふ様し。古より傳ちける樂家の譜も然る體  
の亦又此方コナタより片假字出来たる後のも亦ある  
 べし。然れど古書どもの中より其書の趣よりて摩魔那  
 どを廣。歷。曆。雁。あ。ど。を。尸。密。を。ウ。私。を。ム。義。を。父。音。を。上。  
 訓。を。川。反。を。へ。お。と。又。行。從。を。イ。位。を。イ。権。を。才。歳。を。戈。  
 那。と。作。る。類。以。て。多。く。又。佛。書。は。菩。薩。を。サ。サ。縁。覺。を。ヨ。  
 ヲ。瑠。璃。を。玉。玉。莊。嚴。を。サ。ム。聲。聞。を。メ。メ。と。作。る。類。の。書  
 體。も。又。多。か。り。かゝる書ざま。今も亦あ  
 用ふ亦人もあるなりあまらもたの  
 片假字製れる意に相似するは、おもふ様し。

かくて其片假字亦簡便なるよりて音韻の學ハさ  
 らず。惣て漢籍の讀ぎ亦亦目標も用ゆるが。漸  
 よ。何。ま。ね。く。世。は。廣。ま。り。て。字。音。に。お。ま。て。よ。を。も。よ。お  
 れ。う。ち。か。か。ぶ。あ。る。く。處。々。よ。を。讀。む。人。の。心。々。よ。字。旁  
 に。注。し。著。け。又。よ。ろ。け。の。事。を。も。書。記。は。あ。ら。は。し。と。亦  
 行。を。ま。さ。す。つ。ひ。よ。今。の。お。と。く。よ。を  
 あ。け。る。形。象。法。し。さて。その。字。旁。お。も。の。せ。事。ハ。漢。文  
 の。書。籍。ど。も。の。今。も。遺。り。傳。ち。ま。る。を。見。て。知。る。様。し。類  
符宣抄。天平九年六月廿六日。赤斑瘡を病む者。亦治  
身禁食の事を示さる。太政官符の文中。咳嗽。結。使  
或嘔逆。麻と訓注あり。そのかみ片り。亦  
の普く世は行ちれざりけり。證とけべし。又古事記。日

本書紀のどの訓。印本ある古寫本も片假字もて  
とりぐと注せるが中よを以てはやくより注傳へ  
せりやむとおもたるも所。心とて然て見るはし。  
かくてまゝ古人の漢文よむ。近世とを別して一字  
の讀さばをもいみじく大事として互に當否を論ひ  
ささし所。習俗あまけむ。師とある人の讀さば  
を秘して。字中或を字旁。如どふ位を定免置て。朱點を  
施して。弟子に教へ讀し免ある事あり。ささ其朱點の  
位。如處。片假字もて訓さまを注せる圖を作り置て。  
弟子も授くる事としてけり。あをを點圖と稱ふ。俗に

乎古止點圖といふ。あをなり。乎古止と稱ふ由又其中  
の四聲音訓切點懸點反點漢吳音訓引合如どを示は  
圖も有り。故師とある人の家々にて點圖異ふ。て他  
門の人見て容易く知るあとを得ざりしなり。其點圖  
今も遺  
り。其を一二寫して下に出すはし。さばど其を煩を  
しく。かひを見せむ。如さあをを。其點圖のみ隨ひ  
てあるはくも所らば。又さる師をたのおぼして書讀  
むもの。新に作るはくも所らぬ。己ざを。如む。い々よ  
讀とりて。上に以てするおや。字旁に片假字もて。其よ  
みさまを注し添ふる。このおのりから漸に廣まり







ろよ。まのりの手習い。きるをさし出し。云々。とあるを  
もて。れもひやる。後。草假字を書習ふ。は。ト  
免ふ。難波津浅香山をかく。ま。洞物語國讓卷に。此書  
を源氏物語より。取れ。男手。ちかき。よ。あ。同  
じ。り。を。さ。ま。か。あ。け。り。歌云々。真假字を  
假字を。別。ある。字。を。女手。ふ。歌云々。草。は。ト。免。ふ。男  
か。り。て。書。る。由。り。女。手。ふ。假。字。を。行。草。り。ど。よ。さ。し  
も。あ。ら。び。女。も。あ。ら。び。真。假。字。を。行。草。り。ど。よ。さ。し  
つ。た。ふ。か。あ。あ。歌云。あ。で。歌云々。草。と。以。て。大。き。に  
か。き。一。卷。よ。た。里。同。藏。開。卷。よ。か。ら。取。志。き。し。を。中  
より。お。し。を。り。て。大。手。さ。う。に。作。り。て。あ。川。さ。三。寸。を  
の。り。あ。て。一。よ。を。例。の。女。手。二。く。ご。り。に。お。と。あ。さ。ふ

かき。一。よ。を。さ。う。真。假。字。を。く。ご。り。に。お。と。あ。さ。ふ  
あ。さ。か。ん。な。ひ。と。川。を。あ。し。で。お。川。例。の。手。を。上。よ。例。の  
あ。る。を。よ。お。さ。せ。あ。ふ。と。云。え。と。る。を。歌。の。字。を。さ。ま。さ  
ま。に。書。て。も。て。を。や。せ。る。さ。ま。あ。ら。び。又。狭。衣。物。語。此。物。語  
部。が。女。大。貳。三。位。作。り。と。河。海。抄。よ。る。と。見。ゆ。大。將。十  
八。歳。の。あ。ろ。五。月。四。日。内。より。あ。う。て。ゆ。道。ふ。て。半。葉  
に。集。り。居。る。女。ど。も。の。中。より。軒。の。菖。蒲。を。一。す。ち。引  
れ。と。し。て。歌。か。き。て。ゆ。と。せ。て。お。あ。と。ろ。と。起。御。隨。身  
あ。と。其。日。ご。り。に。硯。も。と。免。て。奉。り。た。る。し。て。き。う。が  
み。よ。か。さ。あ。ん。あ。ふ。見。も。日。う。て。き。あ。け。る。あ。お。れ  
し。形。べ。て。軒。の。あ。や。免。の。お。ま。し。あ。ら。び。お。さ。さ。き

おゐらせんといらせぬまで。わらわの入らんところ  
せしり見よとのとまへむ。半部たらく所げこそ  
て。人々あま見え侍りつと申せぬ。何人あらん見知  
り。さうはるまやとむかりはれほせせ。かやうのうち  
つけあさう形どを。わざと御心もいらぬ。とらえさ  
り。さう次の文ふ。又形日を所々に御ふみあきぬふ。い  
ろいろ形紙の色をどへ形どのえあらぬ。あまことり  
ちらしてまゝあまやうにおしすりいゝかきぬふ。御  
手あげあどてう少しものゝ心あらん人形いさづ  
らよかへさんと見ゆる。とらえ。此ほりよも手いさよ

く書ぬる趣も記しきるに。志う片假字もて歌書ぬ  
へはた。それあみ歌も形あさう。女ふみあどを。草假字  
もて書く形らひあるを。こゝもてを知らぬ女どももの  
うちつけ懸想を形む。わざとあさう。ろいろあらぬさまをあ  
らえして。あとさらにこちへ片假字もて。返歌  
書てはあはしきる趣なり。又同物語も。たきぬひて  
り。手まさび形やうに。あまかあま。かひこれああるを  
あるもあらぬ身を人のひとく。やおもひあはらむ。  
こ形も情なり。風情を里。又うまかう形を御扇のある  
て云々。け。そのかゝ片假字を用ひきり。さぬたもひや





字書なるを見せり。歌集は免づらし。それたをや  
る書ありしる手れすぢ。以みし見も能るを所れど。  
目なきさゆほどを。うう見をたかふあるとある  
どころありて。以さくわびらほしあり。此歌ひと  
寫して下に出は。或人云。歌集まゝ伊勢源氏の物  
語をも。片假字にて書る古筆のいさくわび。残れる  
を見せり。事。さてある。片假字の字體を。上り擧げり  
りといふ。真備公の製ふ。空海能増補せざるを合せ書る四十七  
字ぞ。舊能<sup>モト</sup>能<sup>サ</sup>べての體ある法き。今世は普く用。其を上  
り論へるがごとく。能あがうへふ。古くかたなる書籍  
ども。いづれおも用ひけるをもても知る法し。然るに

其中の異體あるを。交するを。舊能<sup>モト</sup>能<sup>サ</sup>字體を用ひ熟<sup>ナ</sup>る  
るおふく。後々更に製<sup>ツク</sup>るものなる法し。其は草  
も。漢字の古よりやうく。轉<sup>オ</sup>る。自然のいさくわび。能  
合は。但し上り云へる。今昔物語集を。は。免。事を記せ  
る書どもに。異體を書けるを。以て少く。漢文能訓<sup>ヨミ</sup>法<sup>サマ</sup>字  
書能訓を。に。さ。ま。く。能異體の多かるを。も。は。ら。博  
士。ぞ。ち。たる。人。々。能。心。々。製り用ひる。し。み。ぞ。所。る  
法き。かくて近むるより。異體を用る。おとの漸<sup>ヤ</sup>し。廢  
て。近世ふねよびて。を。さ。く。何。る。事。能。く。お。能。川。り  
ら。舊能字體のみ。き。ち。か。へ。り。て。書。く。事。と。能。交。る。を。

おだらははくからでいせよき事なり。おを林道春主の  
 體をむをさく用らさざりゆと見ゆる。其後の人  
 人もそれと倣ひてものせるが例とありきる。や何  
 むらさ終ど又異體も見知りおく。清きことぞあねむ。年お  
 ろ古書ども中ふ見阿くりきるを。舊體の字下ふ  
 舉げ。ちこそきらの本字を推量し注しつけつ。但しそ  
 の片假字の古書どもよつね多かるも又おれくも  
 見えたるも又きくも二見阿くりたるもあり。已と  
 おろ書とく免置けるも。今とくも其本書を記  
 いれり。ざり清るも阿るを。今とくも異體あるを見  
 たりとねほゆきと。此も載するほり。清るも阿り。又已が  
 はやく書とく免置けるをとり。阿りめて記せるなり。  
 片假字異體證文切字例

但し此の書どもに見えたるは悉書名を  
 標し堪んとい二名を載て省くるが多し。

中 江 延 舟 菅 百 類 真 親 令

尚書古本訓點元跋了  
 三家秘本十筆  
 江家次第古本  
 三部訓點  
 延喜式古本  
 二部訓點  
 船橋環翠軒秀賢  
 神代紀抄  
 菅家點圖  
 百寮訓要  
 古寫本  
 類聚名義抄成蓮院  
 本字訓  
 真言密書訓  
 長覽仁安記  
 僧親鸞書  
 令義解古本  
 訓點

○假字本末下卷

好 延 最 无 將 類 第 新 神 尊

藤貞幹好古日録  
 據古書所載  
 延喜式京極本  
 最勝王聊簡畧集  
 訓點  
 无量壽經平河書院  
 天片平壽經平河書院  
 蓋片平壽經平河書院  
 將門記  
 類聚名義抄  
 古字訓  
 古第譜  
 新韻集字訓  
 神樂歌古本  
 催馬同樂古本  
 尊意贈僧正傳古本  
 宣命用真假

○世一

語	訓點 古語拾遺古本	日	日本書紀訓點古本	醫	印本 方古本訓點	寬	寬平法皇御點圖	天	天治寫本 萬葉集	長	長兼寫本 蒙求目錄	後	後深草院御記點圖	卜	卜部家點圖	古	顯昭古今集注		
仁	仁智要畧古本	神	永仁寫本 神代紀	萬	萬葉集注	醫	丹波雅忠著 醫畧抄訓點	色	色葉字類抄	孝	同本中野朱校大 江孝言本假字	浪	浪華帖所收古筆	古	古事記真福寺藏 本又同書應永殘本	琉	琉球往來訓點	伊	伊勢貞丈主隨筆 據古書所抄

興	興福寺延年舞詞	今	今昔物語集	曆	延曆寺宝幢院點圖	見	日本見在書目錄	金	金澤文庫本 群書治	催	催馬樂案譜	字	字訓古本	朗	朗詠要抄 延慶書	了	阿之 同安之草	了	伊之 同安之草	了	伊之 同安之草
後	後撰集片假字書	園	園城寺西墓點圖	高	高野山中院點圖	道	道風朝臣書佛經	平	平家物語真字本	密	僧法密 鞍鞍	拾	拾芥抄	醍	醍醐寺藏神代紀	草	草假	草	草假	草	草假

○假字本末下卷

○其















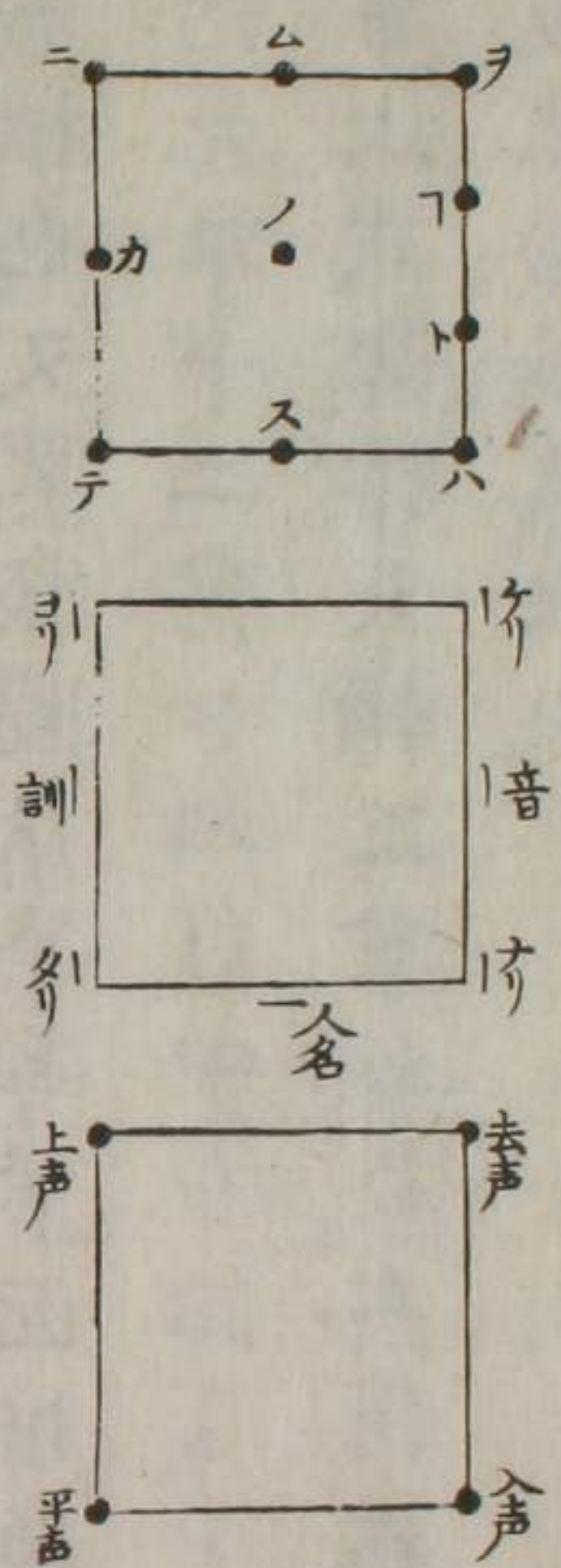
書付之無表紙。

おの東宮御書始部類記に曰。後深草院御記。永仁二年

六月廿五日。此日皇太子御讀書始也。云々。點圖角筆等。

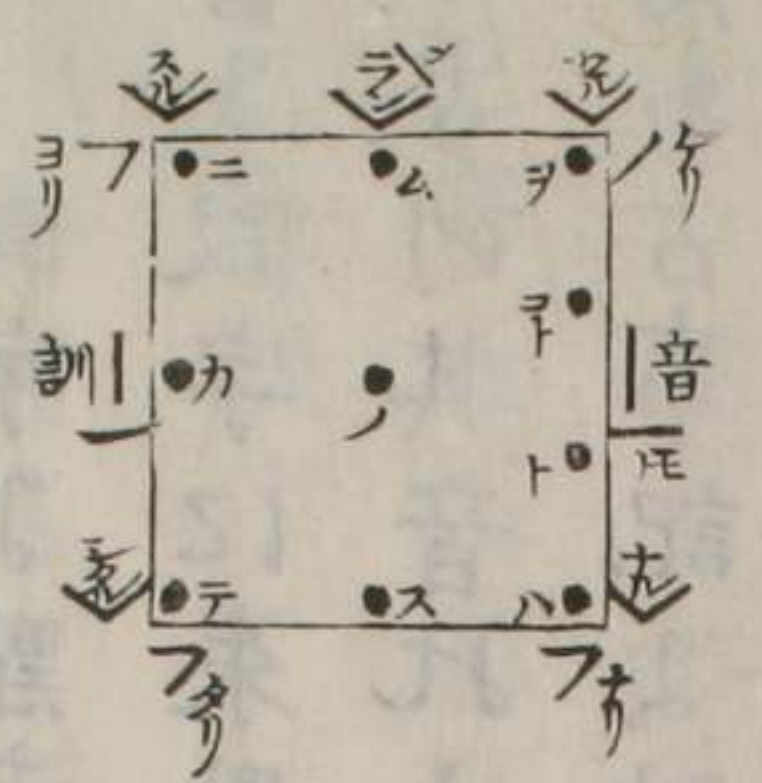
此兩物。學士資宗所用調進也。點圖白色紙書之。料紙一張

也。一枚。左方點圖三置之。草紙寸法高弘各五寸。角筆長



此寸分各方一寸也

又和漢朗詠集の點施、いゝる古寫本の奥よりその點圖を載せり。とて。或人此寫傳へせり。



とあり。此外點圖。大學二曹。菅家江家。紀傳明經博士。清家中家。おのト家の點圖。まの延曆寺所用寶幢院點。東大寺三論宗所用點。興福寺所用唯識論喜多院點。高野山所用中院僧正點。園城寺所用西墓點。太秦廣隆寺點。おのどの圖あり。大率を相似て各異あり。古書といふをみる。まの種々。異あり。見えり。おの

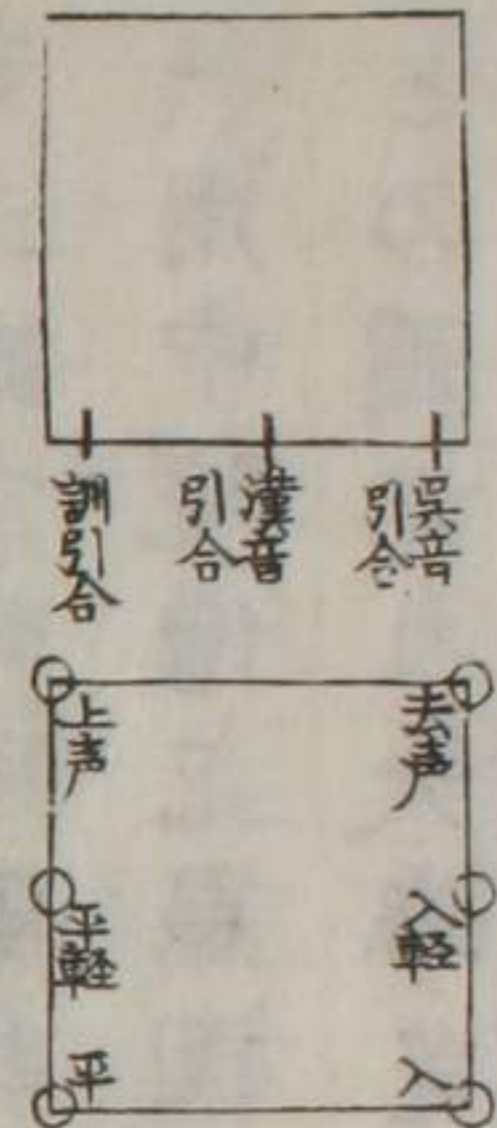
○假字本末下卷

○其

明經家點圖之中

紀傳家點圖之中

興福寺點圖之中

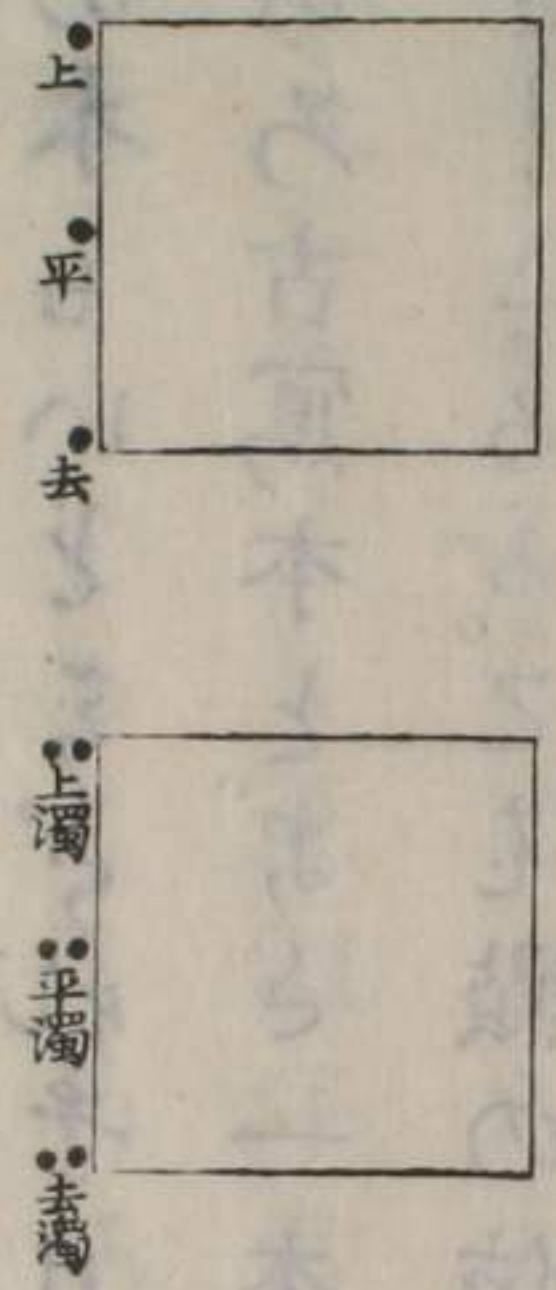


かくるさまあるを。字を引合て其讀みざあ。又四聲の  
どの點圖あり。但し四聲の點位を漢國の  
假字に點を施して音を示しある例

古書に假字に朱點を施して音の上下を示し音るが  
あり。その其音れ上下を示せる事其書に見えらるるを  
ト免む古事記に神名などの中其字の下に上去等の

字を小く注し添らるとあるあり。然るハ言の連きざ  
おもて音を誤るべきところに漢國にてさざする四  
聲の目を假りてよむ音其上下を示せるものあり。凡  
て漢語の音も平上去入の四別あり。斯方の語も  
彼に准へて云へむ。平上去入三聲あり。平を上らば下  
らば平ある聲。上を上げる聲。去を下る聲あり。古事記に  
平聲を注さざばハ。杞の注らるべき語の無  
かりあるは。古の語を嚴重にして。その音の上、下、  
をさへに謹免る事然りき。かくて古書ども其中心假  
字に點を施せざるを。もたらす其音の上、下、

を嚴重に謹める所為ワザにて以て之を免てし。今これの  
 色に見ざる書どもの中ふり云々。類聚名義抄抄古  
 本の仁治二年に寫しざる本あり。三字訓の片假字に朱もて  
 音點を施しざるが多し。卷首に云片假字有朱點者皆  
 有證據。各有師說。無點者。雜々書中隨見得注付之。所不  
 知追々可決之。と云ひて。をやくより音を重きものと  
して點施して示しよりし事  
れもひや音點施したると然らぬがあり。さて其音點  
 を檢るふ。上平去に位を定て。訓を注せる片假字の字  
 おとふ。左旁に朱點を施しざり。今其點圖を作して  
 こふ所ぐ。



かくおとし。おと類聚和名抄の古寫に殘缺本の和  
 名に真假字。醫心方の古寫本第三に載せる藥物に和  
 名の真假字。ともし朱に音點あり。その點例を名義  
 抄と相同し。共しその音點に隨ひて其言を  
唱試むるふ。今の京記のおとし又字鏡集  
 抄與書に。寛元三年四月二日。小河法印乘澄示云。朱點  
 東宮切韻。墨點。唐玉篇也。云々。寛元三年五月十日。尚成  
 云。墨點。不審字也。朱點。詳之無不審字也。と所れた。こは



も名義抄のごとく。字訓の片假字は左旁に點施した  
りしものなり。然るにねのまが見ざる本ども、いつま  
も數度轉寫を経せりとねぼしくて。寫誤多く點をた  
寫漏せり。おましく左旁に墨もて點さしとるも、ゆ  
れど、ひとみごまてあらぬ位トコロのものにせれむ。據る  
よとらば、くちをいれざり。又色葉字類抄に載さ  
る神名も、をりく墨の圈點見えとせど。これれも、  
抄の本もいとまざれきり。こまもと延喜神名式の古  
本に據りとるよやあらむ  
近あろ古寫本と、おま一本得ざるよ。一本に朱もて  
點さしとるが。こま點の位いとみざりあらば、普

通抄本とをよめり。又古事記、日本書紀の古寫本は  
中も、をりく真假字書は歌文ウタコト、おま訓ヨミは片假字に  
も。朱點さしとるところあり。ねほろまよろしく見  
ゆ。點例上よ云するよ同し。書紀の印本よ。まれに黒圈  
下よ舉るもあま同し。 顯昭は古今  
抄點ありど。こまいきくまざれきり。まも顯昭は古今  
集注、袖中抄の古寫本も、とあろく朱點あり。こま  
らを寫誤多加らば見ゆ。さてその古今集の序注は跋  
よ。總載管見之所、勸愁備竹園之高覽云々。壽永二年云  
云。次よ文治二年正月廿四日。依重仰差聲シ加點カ了。建久  
二年九月五日。重下賜加點差聲訖。同歌注の卷々は跋

又文治元年云々注進之。重賜差聲とあり。顯昭此注を  
某親王に奉り。重て其仰よよまて點施して奉り。ま  
其親王重て點施して賜ひたる由あり。同人の散木集  
壽永二年十月七日奉梁門教命注進之。重下給差聲了。  
顯昭とあり。但し見在る本ども其差聲の點を寫脱せ  
り。そ然加る所布差聲加點といひて。語音の上下を  
嚴重よりよりいと知るべし。書のさまふよりて。古  
尤多く然ものしきりけきを。後世よあまて。其點を  
いさばらぬる事のごとくたもひて。寫しとらざりつ  
る本の。今も多きある法。件のほり此書どもふも。其  
點あるを見きりしと。今日す然もより。又さ然も細

川、幽齋主然もいづら書あへる。古今集の抄物然。歌詞  
中も朱點施し多分法を見きりた。さまむ所布近む  
りしあても。語の音を嚴重に謹む事。まこときたてざ  
りけるあり々々。かくて近き世より古學おこりて。彼  
此の大人をち。言の道々をふさ稱證して。た布あさか  
けること明く。あきらあふありぬるを。いせもくく然  
てききたふと然もあをせむを。いまご音の上下の事  
をバ。古人のごとく嚴重に意得て。さざせる人然きあ  
えあぬそくちをしきや。いづ其をちをも正し明ら  
先て。世よむろめむ人も。れ。さてあさ片假字の異體

をむ古書讀を勉むのみ心得おきて。ことさらむ古の  
み書くたとをせむ。舊モトのまゝみて傳ちまゐる今の世に  
體サマを正しく鮮明アサヤカに。目やすく書べきこと。伊勢  
貞丈主の隨筆に書ふ。真字と片假字とを交へ書くと  
た。口を口舌あどの口におぎれ。二を二三あどの二は  
まぎまぎ。力を勇力あどの力におぎれ。夕を朝夕あどは  
夕におぎれ。子を父子あどは十二支の子におぎれ。かく  
混ト誤りやすれた字を。文の害とある事あり。心を流く  
流きあとり。とひち終るるを。おこと不然ることあ  
り。

追考

かく記しおける後。天平寶字五年に書きたる。最勝王  
聊簡畧集と題せし佛書。片假字を用ひて點を施し  
をるを見たり。此書吾友佐藤方定が親しき人。或古寺  
より得たりと云々。秘藏ヒメモテるを。おのまゝ見せむと  
て。暫とて借もて来て見せしむるあり。古代の厚紙  
を書て一卷とせり。いよく舊を盡て。卷舒マクノビに堪へぬを  
かりありきたるを。薄紙ウスカミに二面より張繕シユひて。透スし  
て見る流く。さて其巻首に件の題名ありて。序に我日  
本八嶋國志貴嶋宮。謚天國押撥廣庭天皇御宇七年戊  
午十二月廿二日。自百濟國主明王奉慶佛像經教。大臣

○假字本末下卷

○世

蕚我稻目宿祢始建佛法起尔戊午今至寶字五年辛丑  
 所經年數二百廿二年。下と書て。卷軸に天平寶字五年  
 と細字に識せり。序は今至寶字五年辛丑云々と云へ  
 ると同年の書むすれをち此書の作  
 者自ら筆形を修し。さて此書漢文さまるを書きれど  
 拙きかきさま多し。字体も拙けきど。さほが古様よ  
 て手のまぢ當時の書形。さく其本文真行の體を交へ  
 る修きおと疑わく覺ゆ。書て。字旁にとあろく片假字も訓を注し。天仁乎  
 波を施し。あゝ反點を附する所ど。おほろ今この世に  
 體は異あらん。連讀の字間。に附するとあろもあ  
 り乎古止點を施しきる處をあらん。  
 さく其訓點反點。表面を多く朱を用む。裏面を本文を  
 書けり。天仁乎波を書きり。其を本文の字列。あゝ墨

色筆勢もて知られり。山科 此事を聞て云。或法  
 相宗の僧が談ふ。已ら宗もて  
 其經疏形と書く。天仁乎波をむ。本文を書けり。がら  
 書く古實形りと云。然る例もて書るものあるべ  
 し。と云。さて其片假字。ねほろ今この尋常。用ふる體  
 形り。を多くて草體に形せり。免て書き。異體ふを。只  
 々。あれらるを交へ書り。あゝと書べき處を。そ  
 〇と書り。あゝに。のどのごと。草畧。片に。などのおと  
 き合字形體をあらん。但別本文は。菩薩を并。あきよよ  
 と作るところあり。多てねもへむ天平寶字の頃。既し片假字を用む。り  
 證なり。

